

中野重治全集

第十八卷

中野重治全集

第十八卷

筑摩書房

中野重治全集第十八卷

一九七八年五月三十一日初版第一刷発行

著 者 中 野 重 治

発 行 者 岡 山 猛

発 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話 〇三例七六五一(代表)

振替 東京六十四一—二二三

印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 板折久美子

第十八卷 目次

プロレタリア文学の人びと

一

後記

五二

著者うしろ書 間口の狭さと奥行きの浅さと

五九

解題

プロレタリア文学の人びと

『種蒔く人』の人びとへ感謝

三十二歳から四十三歳まで

『青野季吉選集』について

人と人との親しみ

青野季吉研究

『海に生くる人々』

葉山について

「海に生くる人々」の言葉

『葉山嘉樹日記』序にかえて

葉山の手紙

発病から死まで

『五月祭前後』を読む

山田の論文の長いあいだの読者として

大宅壮一の思想的立場

三 六 八 九 三 六 九 二〇 三九 四三 四五 四八 五〇

大宅壮一についての妄想

印象以外

蔵原惟人『藝術論』について

一つの思い出

「党生活者」のなかから

小林多喜二の原稿につき

小林多喜二の日に

「党生活者」について

過去の作家・作品の新しく呼びかけるもの

『小林多喜二研究』前がき

本の作り方の問題

学びに学ぶこと

感想と思い出

『小林多喜二作品集』について

新しく発見された多喜二の通信

書かれるべき小林伝について

心のやさしい田舎者

一一三

ささやかな記憶

一一三

小林多喜二の一面

一一六

想像する力

一一六

思い出と記録

一一三

二月二十日

一一五

今村恒夫君の病氣につきお願い

一一四

今村恒夫の病氣のこと

一一八

実践的な理解

一一五

『新しきシベリアを横切る』その他

一一五

作者にかわつて

一一六

二つの特徴

一一七

故人の思い出

一一九

死のあとで

一二一

死人に口なしか

一二五

宮本百合子の研究

一二九

宮本百合子の読み方について

記憶のために

宮本百合子の文学について

彼女の新しくもたらしたものについて

第十二巻の評論について

編纂者の一人として

記録がわり

一つの重要な訂正

私あて宮本百合子の葉書、手紙

「二つの庭」について

宮本百合子の戦時中の社会評論について

『両地書』と『十二年の手紙』とについて

宮本百合子の人柄と今日の問題

あれこれの思い

宮本百合子のこと

あのことろ

窪川鶴次郎『昭和十年代文学の立場』

ひろし・ぬやま

一つの日本人の問題

貴司山治君

勝本の死

下川の詩集の跋として

伊藤信二のこと

久保栄のなつかしさ

「中国湖南省」と小形式脚本とについて

『久保栄全集』完結記念の席で

思いつくままに

久保栄について

徳永直『八年制』について

『妻よねむれ』について

やはり早すぎた

橋本英吉のこと

二九二

二九二

二九三

二九四

二九六

三〇〇

三〇一

三〇三

三〇四

三一〇

三二四

三三〇

三三六

三三八

三三〇

三四一

春三題

黒島伝治と細菌戦

黒島の『軍隊日記』

兵卒と農夫との作家

壺井栄のたましい

「暦」の世界

小豆島の言葉

我や先き人や先き

ほとんど物質的な糧

枯れている花のことも

我慢しすぎたようなところ

小熊秀雄について

『流民詩集』序

小熊秀雄の詩

『小熊秀雄詩集』について

健康な眼

小熊の思い出

三六

一九三五年の小熊の詩一篇

三七

死後三十三年に

四〇

小熊秀雄

四三

『くれなる』を読む

四六

「くれなる」の作者に事よせて

四八

『樹々新緑』について

四七

『キャラメル工場から』について

四二

「くれなる」について

四三

『私の東京地図・くれなる』について

四〇

友人として

四三

『女茶わん』の眺め

四三

佐多稲子断片

四三

「樹影」の野間賞受賞の席で

四七

『栗林一石路句集』について

四〇

茶碗の蹄

四六

詩集のうしろに

一つの生涯

鈴子のことについて二、三

プロレタリア文学、人と作品 一

プロレタリア文学、人と作品 二

北海道の作家たち

四四九

四五〇

四五七

四六六

四八〇

五〇三

プロレタリア文学の人びと

『種蒔く人』の人びとへ感謝

時刻も遅くなりましたし、壇の上のお客さまがたはずつとすわりつづけでいらつしやいますから、われわれ若
い者はなるべく簡単に話をしたいと思います。

第一には、研究所の人たちが非常に苦勞をして、あの復刻版を完成してくだすたことをありがたく思います。
あれにはおそろしく骨が折れたことと思います。しかしもし、四十年後に骨折つて復刻版をつくるのに働かない
内容の『種蒔く人』であつたならば、研究所の人たちも苦勞をして復刻版の仕事をしたはずはないと思います。
私自身も『種蒔く人』には親しんで来ましたが、全巻に目を通すことができるのはこの復刻版によつてで
あつて、これによつてわれわれの仕事を絶えず源にさかのぼらせて考えることができるようになりました。その
点、研究所のみなさんに感謝するとともに、研究所の人たちが勞をいとわずあの仕事をやりたいと思ひ立つに至
つた、そういう仕事を、四十年まえにしておいてくだすつた今日のお客さまがたに感謝したいと思ひます。

われわれが日本で現在歌っている「インターナショナル」、あの歌の「インターナショナル」のことは、さつ
きも話がありました。つまりあの歌は『種蒔く人』の人びとが翻訳したのだ、それを練つて、そして今日に至つ
たのだ、ということを知らないで歌っている人たちの場合でも、この人びとは完全に『種蒔く人』のお蔭になつ
ているのだということを私たちは知らなければなりません。ほかのみなさんが話をしてくれましたので、翻訳の
さまざまについてはふれませんが、ただ一つのことを申したい。

残念なことに、報告がありましたように青野季吉^{すよきち}さんは今日ここに見えていません。われわれは最近にこの人

を失いました。だが、青野季吉さんによつてレーニンの「何をなすべきか」の最初の日本語は出来たのです。それは検閲のために悲惨な形に削られていましたが、しかし今私の言いたいのは、翻訳者が、これを日本語に移して日本人に伝えたいという熱情にかられて翻訳の仕事をしていて、それが読んでいてわかるということ……私には金もうけのために翻訳するのを一概に否定するものではありませんが、そういうものと比較してということではなくて、あの種の文献が、訳者が自分自身それによつて、自分の行く道を決定しようという、その気持ちの上に立つて翻訳がなされている。ですから、仕上がった翻訳は、ひとつの文学的藝術作品のような感銘をもつて読まれました。こんなに、翻訳の仕事は発展していますから、日本最初のこの青野訳には欠点が見出されるかも知れません。あるいは見出されるだろうと思います。しかしそれにもかかわらず、いま申したような事情から、当時の労働者と青年とが非常に強くとらえられた、つまり背骨^{*はね}がとらえられた。そしてこういう仕事を実に『種蒔く人』全体をつらぬいていたことを今思います。この点に私どもは大きな感謝を捧げたいと思います。

また『種蒔く人』のグループが一貫して反戦のために闘ったこと、プロレタリア革命擁護のために闘ったことの二つもわれわれとして強く記憶しなければならぬと思います。ごらんになればわかりますように、『種蒔く人』の最後の『種蒔き雑記』、あすこで^{かめいど}亀戸の殉難者を哀悼する特別号を出したところにもよく現われていると思います。私は、これは『種蒔く人』の全巻をしらべた上で言うものではありませんが、日本の革命的労働者が、日本の軍隊と警察とによつて大震災のどさくさまぎれにあいう形で殺された。それを弔^{とら}うのに、あの人たちを「殉難者」として表現したのはこの小さなグループただ一つだったのではないかと思います。調査にまたなければなりませんけれども、殉難という言葉はそれまでに日本で使われていました。ただそれは対外戦争の勇士にたいして使われ、日本のアジア大陸侵略のための仕事で仆れた人びと、黒竜会の仕事とかいう方面で使われ、さらにさかのぼつて、明治維新前後の勤皇倒幕、佐幕開国の歴史に没入する人たちに關して使われてきました。そういう殉難者のため、後日^{ごじつ}天皇から叙位の御沙汰があつたというふうな……。しかし『種蒔く人』のグループは、亀

戸で殺された日本の青年労働者、これを殉難者としてあつかいました。これは、言葉がいかに正當に規定されてきたかということの歴史としても記憶しておくべきことではないかと私は思います。

またこの特別号は、ごくごく薄つぺらなものですけれど、この雑誌に書いてあることは、労働者でも誰でも転載してよろしいとそこに書かれています。「この雑誌の転載をゆるす」ということが書かれています。これは、当時の進歩的なイデオログたちが、自分の版權というものを、版權という言葉を使っていたかどうか正確に覚えませんが、どういうふうに、どれほど真剣に、同時に具体的に考えていたかということ、考えただけでなくて、それを実行したかということとして記憶されるべきものとは私は思います。

私が高等学校にいたころのことでしたが、ロシアにおける飢饉救済のための募金を学生たちがやっていました。残念ながら、私は金を出さなかつたと記憶していますが、あれなどは多分、この『種蒔く人』の募金に結びついていた、それに促されたところのものと思います。

救援募金といえば最近の中国の問題があります。旱魃かんばつと水害とのために中国では農作物収獲が激減したと報ぜられて、そこで日本でも救援米をひと握り送りたいと日本政府が言いだした。しかし政府が直接には言いだせぬため、赤十字を使って申し込ませた。ところがそれを断られたという事実があります。すると日本の新聞なんか、復交していかないからといって、ひと握りの救援米を出そうとするのだから受けとつたつていいだろう、それを断るのは損得をわきまえない、また人情をわきまえない、かたくな話ではないかといつて非難の調子を書いています。それ以上論じては危険ですからその後は出ていませんけれど、こういうやり方に比べると、問題の取りあつかいにおいて『種蒔く人』のグループは天と地とほどちがつていました。中国にたいして救援米を出すということは言葉としてわかります。しかしその日本がついこのあいだ侵略に出かけて行つて、米・豆の農作物はもちろん、あらゆる財宝の徴発、破壊の作業をやつた。そしてその償いつぐなについて戦後十五、六年になつても一言の挨拶がない。しかも中国側から交友の手をさしのべてきているのにたいしてはくあまでも拒絶してきている。